



キュアリブリンセス *Candy Princesses*

正義の心を悪堕ち洗脳

小説 新居佑

挿絵 りょう@涼

立ち読み版

登場人物紹介

Characters



みやせかりん

宮瀬花凛

／キュアリーアンバー

太陽の力を行使する、オレンジの戦姫キュアリーアンバーの力を手にした少女。亜里沙とは親友同士で、テニス部ではダブルスのペアを組んで活躍している。接する人を笑顔にするような、優しくおっとりした雰囲気ながら、芯はしっかりした性格。



こうさかありさ

向坂亜里沙

／キュアリーサファイア

伝説の戦士キュアリープリンセスに目覚めた少女。紫の戦姫キュアリーサファイアに変身し、風と浄化の光の力で戦う。普段は円花台学園の学生であり、明朗快活で人望も厚い、リーダー気質の持ち主。女子テニス部では部長を務めている。



しまかわゆきほ

嶋川雪歩

／キュアリーパール

亜里沙と花凜のクラスメイトで、円花台学園の生徒会長。品行方正で公平な会長として、生徒たちみんなから信頼されている。とある出来事がきっかけで三人目のプリンセス、キュアリーパールに覚醒し、清め力を宿した氷を自在に操る。

アンリーマン

異世界より現れた、地球の支配を企む悪の組織アクオチーノの幹部。見た目は人間と変わらないが、人々の心の闇から吸収したマイナスエナジーを物体や生物に取り憑かせて、化け物・ミダラークを召喚する。キュアリープリンセスの宿敵。

第一章	友情の絆 三人目のキュアプリ登場	007
第二章	強敵はパール？ 恥辱の洗脳調教	065
第三章	奪われるヴァージン 開く変態快楽への扉	108
第四章	暴かれた秘密 悪に染まるアンバー	161
第五章	崩壊する友情 サファイアの歪んだ恋	199
第六章	快楽のために プリンセスの幸せ	247

必殺の攻撃から、一転して訪れた、自らの清い肉体を変えられてしまうかのような、ゾワゾワする未知の感覚が雪歩を襲う。

一部分が黒く染まった、振袖のようなドレスの裾からのぞく細い両腕で、瞬間沸騰していく自らの肢体を抱きしめる。

凜とした立ち姿だった両脚は膝を曲げ、弱々しくクロスさせ、ぴっちり張り付いたスパッツごと、ブルブルと小刻みに痙攣させてしまう。

「はははっ、お前たちの心の強さは知っている。そのジェルの最大の餌は、お前たちが生み出す心の光だ。まあ、ただ吸い取るだけでは、心の強いお前たちは、それ以上の力を發揮して反撃してくるからな。だが抗った分だけ、快感が増すとなれば話は別のはずだ。くくく、いい格好だな。キュアリーパー」

「う、くうっ……そんな、ことおっ！」

アンリーマンの言った通りだ。ただ技を封じられ、苦痛を与えられただけならば、先日の戦いのように、正義と勇氣、そして仲間を信じる決して尽きない心の光で、必ず逆転勝利を収めることができた。

しかしそれが快楽であったなら、身体が、そして理性すら性的な興奮状態に陥り、それを与えてくれる現状を打ち破る力を發揮できなくなってしまう。

（せ、正義の心が……仲間を思いやる力が、こんな性感に負けるなんてことが……ううっ）
内から湧き上がる噴火寸前のマグマのような快感に堪え抜くために、膝を曲げ、両手で身体を支えている。そのため大きく開いた胸元を、まるで男を誘うグラビアのように、色

つぼくボンツツと前に突き出す格好になってしまっていた。

唇をきつく噛み、揺れる瞳でアンリーマンを見据えているが、その奥で必死に隠そうと
しているのは、目の前にぶらさがった極上のディナーを何時間もお預けされている家畜の
ような、だらしのない牝の表情だ。

（あ、熱いつつ！ くう、ジェルがどんどん広がって…：身体中が、切ないです…：つ）

必殺技のために溜めた光のエネルギーを吸収したエクスタシージェルは、まるで次から
次へ墨を塗りたくられるように、その侵食範囲を広げて、なおも止まらない。

ウエディングドレスを彷彿とさせる、キュアリードレスは、すでにそのほとんどが真っ
黒なラバー状の材質——エクスタシースーツに変貌している。

雪歩が抗おうとすればするほど、同性が羨み、異性が欲情を掻き立てられるようなグラ
マラスなボディラインが露わになっていく。

薄い青色からテカテカの黒一色に変色したスーツを着て、溢れ出る快感に堪えようと悶
える正義の戦姫の姿は、妖艶で背徳的な気配に満ち溢れてしまっている。

「いい侵食具合だ。もう身体が疼いてたまらなくなつたころだろうか？ 伝説の戦士の身体
は、どんな触り心地なんだろうなあ？」

こちらを見下すように立つ悪の幹部が、官能に震える雪歩を無理やり床に押し倒し、二
つの手のひらを伸ばしてくる。プリンセスの誇りと、雪歩自身の嫌悪感から、その手を払
いのけたいが、身体中がおかしいくらいに疼いて、それすらもできない。

「いや、やめな、さ…：つつつ！」

ギユムツツ！ ムニユウツツ！

最後に発した嫌悪の声を無視して、男のごつい手のひらが、半ばジェルに侵食されラバー質に変わったドレスの胸部分を掴んでくる。配慮も優しさの欠片もない、卑劣な牡の欲望にまみれた愛撫。しかし――。

「は、ああつっつ！ ふひいああああつっつ！」

（あああつ、なんですかこれっ!? 胸が、わたくしのおっぱいがああつっつ！）

学園でグラマーといわれる亜里沙と花凜よりも、さらに豊かな乳房を持つ雪歩。

ゆえに、なにかの拍子で胸に刺激を受けたときに、わずかに甘く痺れるような妙な感覚に陥ることはあつた。けれど今感じているこの衝撃は、それとはまったく次元が違うものだ。

「くふっ、はうううっ。はあはあ、や、やめなさいいっ。胸揉むのを、んふうううっつ！」

「ほう。こいつはハレンチな爆乳だ！ そおら、いい声が出たな？ 言ってみろ？ 本当は俺に揉まれて、頭がバカになるくらい感じているんだらう？」

「そんなことが……っ。あ、あるわけ……ふひいっ！ わたくしはキュアリープリ、ああつ、乳首はダメええっつ！」

アンリーマンの指摘に必死に反論しようとするが、ラバージェルにびつちりと覆われた左胸はもちろん、着物状のドレスがまだわずかに残る右胸の乳首でさえも、生地越しに硬く勃起し、先端まで熱く充血しきっている。

その勃起乳首を指先でコリコリと刺激され、同時に豊満な胸の付け根から乳首までを、

手のひらいっぱい水をすくうようにムニムニ刺激されると、ゾクゾクとした明確な快感が、胸いっぱい弾け飛んでしまう。

(こ、こんな……感覚うっ!! ああっ、頭が痺れるっ。わたくし、なんて声を出してえっ) 唇をどれだけきつく噛んでも、男の、嬲るようなネットリとした胸への愛撫に、発したこともない甘ったるい声を漏らしてしまう。

「はっ、ふううっ、ふううっ、ひっうううっ」

相貌がキツと引き締まるのは、ほんの一瞬で、男の大きな手で、媚肉の張りつめた爆乳をギュムツツ! と驚掴みされると、目を大きく見開いた蕩けた表情を晒してしまう。

「どうした、キュアリーパール? 俺は胸を揉んでいるだけだぞ? 得意の冷気を出してみろ? それとも世界を救うより、敵に嬲られるほうが好きなのか? はははっ!」

「う、くっ……言わせておけば……っ。はあはあっ、このジェルさえなければ、あなたに好き放題させは、ひいああああんっ!!」

教科書で覚えた性的な知識はあるものの、強い貞操感から、自慰すら未経験な雪歩にとって、エクスタシージェルがもたらす強制発情快楽は、理解の範疇を超えた快感だ。

(あ、頭がおかしくなりそうです。身体が燃えるっ。特にア、アソコが……ああっ、こんな悔しいのに、恥ずかしいところが蕩けそうに疼いてええっ!)

妖艶ラバーの内側では、まだキスも知らない初心な乙女の肉体が、ありとあらゆる神経を、性的な快楽を感じるためだけのものへと作り替えられている。

「ふふ、すごい汗だな。それに肌の震え具合も上々だ。それではキュアリーパール、お前

が望む快感を、この俺がくれてやるっ！」

アンリーマンはそう言うと、己の股間を露わにした。そこから生え出たおぞましいまでの男の象徴に、雪歩は絶句した。

（な、まさかそれが男の人のオ、オチンチンなのですか!? お、大きい……それになんて鼻をつく臭いなの!? 気持ち、悪い……いつ）

こちらの窮状と、男の優位性を見せつけるように雄々しく勃起している、アンリーマンの逸物に、明確な嫌悪感を覚える。

知識としてある性的興奮状態にある男根とは、形こそ似ているが、大きさがまるで違う。ゆうに二十センチを超える長大な皮剥きペニスは、そこに浮かび上がるグロテスクな血管だけでなく、竿全体がドクドクと気味悪く脈打っている。

竿の先で一回り大きく膨れている雁首の造形は、不気味な異形の怪物を思わせる。しかも男はその巨大ペニスに、新たなエクスタシージェルを、蜂蜜でもかけるように、ポタリポタリと糸を引くくらい、たつぷりと塗り付けている。

「マイナスエナジーに染まりきった俺には、いい性欲増強剤だが……。お前に、こいつを直接塗り込んだらどうなるか……。？ 澄ましたキュアリーパールの淫らにヨがる様を拝ませてもらうぞ」

「くっ、誰があなたの思い通りになるのですかっ！ わたくしは快樂になど決して屈し……はああ、あんっ!!」

強い決意を口にしようとした瞬間、ジェルが塗られた牡竿で、スパッツ越しに女の園を

ズリズリと擦り上げられると、子宮が震え、甘い声を吐き出してしまふ。

「ふふ、しっかり感じているじゃないか、なあ、キュアリーパール!!」

胸から手を放した男は、下卑た笑みを浮かべながら、美少女戦士のムチムチに引き締まった両脚をぐいっとM字形に押し上げた。

すでにドレスのスカート部分はジェルに侵食され形を失っており、股間に残っているのは、扇情的に食いついたスパッツのみとなっている。

そのスパッツもアンリーマンによって、ぐいっと力づくで左右に破られ、誰にも見せたことのない正義の変身ヒロインの牝の部分が露わになる。

（あ、あぁっ！ 見られています…：わたくしのアソコがっ。く、悔しいっっ！）

将来愛し合う人に初めてを捧げようと強く心に誓っていたのに、よりにもよって、人類の敵である男に大事な部分を凝視されていることに、強い恥辱と屈辱を覚える。

「ほほう、やはり処女か。しかしそれにしてもひどい濡れようだな。それにすごい牝の臭いだ。平和を守る戦士のくせに、本質はド淫乱のスケベ女だったとはなあ」

「ち、違います！ これはこの黒いスーツのせいです…：っ!? くふううっ!」

（こんな卑怯な罠に嵌められているのに、敵の前で発情しきっているなんてえっ）

アンリーマンがキュアリープリンセスを墮とすために用意した、エクスタシージェルの効き目は、すさまじいものだった。

悩ましいボディラインを包み込んでしまったラバースーツは、風がかすかにそよぐだけで、ズクンッ！ とした強烈な劣情の稲妻を、全身に迸らせてくる。

女の急所である膣穴は、理性を総動員しても、植え付けられた魔性の快感本能によって、ドブドブツツと熱い牝の本気汁を噴出し続けている。薄く切りそろえた恥毛は、にじみ出た愛液でべつとりと濡れ、すでに満開になっている陰唇を艶やかに彩っている。

左右にくつきりと割れた女唇の頂点についた、敏感なクリトリスも乳首同様、限界まできつく勃起しており、皮こそめくれているが、ジンジンと熱い痛みが、牝の快感を受け入れよう理性に急かす。

「ふふ、これがキュアリープリンセスの処女マンコか。存分に染め抜いてやるぞ。くらえ、キュアリーパールっ！」

「く、んぐううつつっ!!」

雪歩はなんとか身体に力を込めようとするが、疼いてやまない快感によって、まるで力を発揮できない。

相手を弾き飛ばすことも股を閉じることもかなわぬまま、男の極太ペニスが、ミチリツと雪歩の強制発情牝穴に、容赦なく突き込まれる。

ズチユウウウツツ!! ブチイイイツツ!!

頑かたなに守ってきた貞操が、ビリリツとした痛みとともに、破られるのを感じた。一人の少女としての悲しさと、正義のヒロインとしての悔しさが胸を突く。

「んぐううつつ!! ふぐつつ、んぐふううううつつ!!」

（あ、ああっ! 入ってきます……っ。これが男の人の、オチンチンんつつ!）

ジェルをべつとりとつけた男根が、処女膜を突き破り、そのままズブウウツツ! と雪歩

の膣へと突き入れられる。男を迎えるのは初めての肉膣だったが、すでに発情しきつてい
るために、ミチミチと無理やり拡張させられながらも、憎き敵の逸物を女の秘奥へとウネ
ウネと誘^{いざな}っていく。

しかもゴツゴツした硬い肉棒の感触の上には、魔性の媚薬ジェルがたつぷりとコーティ
ングされている。

太く長い男の竿が、柔らかく引き締まった処女膣の壁をズリユリユツツ！ と無遠慮に
擦りたてるたびに、ただでさえ敏感な牝の粘膜が、気が狂わんばかりの牝豚性感へと改造
されていく。

「キュアリーパール！ 今からお前を快感しか考えられない、牝へと調教してやる！」

そう言つて、アンリーマンが深く腰を引き、そのまま猛烈なピストン運動を開始する。

ズチヨンツツ！ ズブンツツツ！ ズブズンツツ！！

「んぐふううつつ！ んんつつ、ふぐうんんつつ！！」

（わ、わたくしは牝などに……くふああつ、なんですかこれえ!! 膣が溶けるっ！ オチ
ンチンで突かれるのが……き、気持ちイイイイツツ!!）

反抗したいが、膣からもたらされる圧倒的なまでの快楽波動に、全身が甘く痺れていく。
太くて硬いペニスの力強い一突きごとに、キュアリープリンセスの使命感が消え去って
いく。代わりに、どうしようもないほどに煮えたぎる牝の欲情が、雪歩の理性と肉体を淫
らに沸騰させていく。

「んぐふううつつ！ ふああつ……んひつ……ふ、ぐうんんつつ!!」

(あ、いいっ、はひいいっ……こんなことって、あっ……ありえないいいっ！)

生徒会長として、自ら率先してみんなの規範となることを心掛けてきた。欲望に流されず、逆にそんな生徒たちをたしなめてきた。

清楚可憐な学園の誇り。そして正義を守る伝説の変身ヒロイン。そうあることに、なんの疑問も抱いてこなかった。真摯に生きること以上に大切な、心が熱くなるものなどないと思っていた。なのに――。

「どうした!!　なんてエロい声を出しているんだ、キュアリーパールよ!!」

「おっ、あぁっ……ふぐうっ、んんっつ!　そんなことあるはず……ほお、おおおっ!!」

出したくないのに、男のペニスズブズブと膣を出入りすると、欲情した牝犬のような声が漏れてしまう。

敵の両腕に押し上げられた、むっちりとした両脚の太腿が、おかしいくらいにブルブルと痙攣し続ける。身体の内側がどんどん熱く燃え盛っていき、黒いジェルで覆われたラバースーツに大粒の汗が流れる。

(これえ、敵にレイプされているのに……っ。気持ち、イイツ!　ダメです、正義の戦士がこんな快感などに溺れては、いけません……んんっ!)

「ふうっ、ふうううっ……んひっ、おおおっつ」

猛烈に疼く桃色の快感の中、頭を左右に振って、なんとか理性を保とうとする。人々に愛されるアイドルだというのに、発情汗を飛び散らせながら、快感を必死に振り払おうとする無様すぎる姿を晒してしまう。

（わたくしは負けま、せんっ！ 絶対、に……いい、くああんっっ！）
けれど、ジェルによって侵食、改造された快楽神経の束という束が、男がもたらすレイプ快楽を、何十倍、何百倍以上にまで引き上げ、気高い美少女戦士の肉体を、淫らな牝豚へと作り替えていく。

「ほう、まだ堪えるか？ 普通の女ならば、一突きで気が触れ、屈服するようになる。さすがだ。しかしその力が、我らアクオチーノのモノになるとは。くく、楽しみだ。さあ、身も心も焦がす、とっておきの快楽を未来永劫刻み込んでやろう！」

そう宣言したアンリーマンの腰の動きが、一気に速度と力強さを増していく。両脚を肩の上にかつぎ、両手でラバー状のエクスタシースーツに包まれた、雪歩の爆乳を揉みしだく。

「ふぎいいんっっ！ やめっ、同時なんてっ！ くひっ、んひいいいっ！」
コリコリ、ムニユムニユ……ズチュンジュドンツツ!!

腰を浮かび上がらせ、斜め上から角度をつけた男の剛直が、雪歩の膺はおろか、大切に敏感な子宮の入り口を、容赦なく突きまわってくる。

張りつめた豊乳が、広げた両手によって思い切り鷲掴みにされ、エクスタシージェルによって快感神経の塊となった乳房を、力任せに揉みしだかれてしまう。

はしたなく勃起した乳首は男の指の間でギュウッ！ と挟み込まれ、根元から先端までシコシコっつ！ と擦られると、胸いっぱい甘い刺激が駆け抜けていく。

（だ、ダメです……っ。ジェルが塗られたオチンチンっ。アソコの中あ、気持ちよすぎま

す！ お、おかしくなるうっ。身体だけでなく、心まで……あひいっ！

一突きごとに軽い絶頂に追い込まれると、全身からブワリッ！ と濃い汗が噴き出て、形のいい鼻孔に、自身の強い発情臭が練り込まれる。

初めは嫌で嫌で、恥ずかしくて悔しくてたまらなかつた股間と全身から溢れるその牝の臭いを、今では中毒になつたみたいにもつといやらしい臭いと、求めてしまっている。

「おおっ、キュアリーパールのマンコが、俺のチンポを自分からきつく引き締め始めたぞ!! やはり伝説の戦士も、ただの牝だということだなっ！」

「そ、そんなことは……っ！ んひいっ！ あんっ、くふううっ！ わたくしはキュアリープリンセス……ああっ、オ……チンチン、気持ちイイイッ!!」

これまで頑なに拒んできた、快楽を認める言葉を、半ば無意識に口に出してしまふ。

男がペニスをズンズンッ！ と子宮に押し当てるたびに、うねる膣壁を入り口から余さず、ジュリジュリッ！ と刺激し尽くすたびに、快楽への肉体改造、そして精神調教能力までも備えた魔性のジェルが、雪歩の媚肉へ直接塗り込まれていく。

（わ、わたくし……なんてことをおっ！ で、でも本当に気持ちよすぎるんです。もっと、あああ、もつとおっ！ ダメですけど、もつとジェルペニスで、犯してくださいっ！）

キュアリープリンセスの気高き心を守ろうとすればするほど、成熟した雪歩の身体に、背徳的な快楽の電撃が流れ続ける。

悪と対するヒロインとして、いけないことだとわかっているが、その想いの強さに比例して、エクスタシースーツがもたらす快楽が、深く心と身体に根付いていく。

「くく、いい反応だ。さあ、キュアリーパール。俺たちの敵が、最強の淫魔に墮ちるところを見物させてもらうぞ。くははっつ！」

叫んだアンリーマンの腰つきが、一層速度を増してくる。ブクツと膨れた雁首が、ズゾッ！ と膣肉の上部を挟り抜き、下腹部から抗いようのない官能の痺れが迸る。

「はくつ、んふうっ！ ダメッ、抜きなさいっ！ オチンチンだめっ！ わたくし、こんな知りませんっ！ クルクルツツ！ なにかすごいキチャいますううっ!!」

清楚で誇り高いキュアリーパールが、恥を忍んで敵に懇願する。

しかし困惑する理性とは裏腹に、牝の本能を暴走させられた肉体は、男を拒むどころか、両脚を無意識に男の下半身に絡めて、自らクイクイツと迎え腰を打つという、性欲に溺れた淫らなスタイルをとってしまう。

（こ、こんな変態スーツなんかには、おおおっ……悔しい、悔しすぎます……ああっ、でもお……こんなの我慢できるわけ、ありませんっつ!!）

黒いラバー状のエクスタシースーツに覆われた、魅惑の肢体がビクビクと激しくはね踊る。もう戦うことも、逃げることもさえも考えられない。

初めて感じた、どこまで燃え盛るのかわからない牝の肉欲の昂りに、恐怖と歓喜を混ぜ合わせて、ひたすらに男のペニスを味わい抜く。

「うくつ、なんとという締め付けだっつ。ふふ、安心しろ。今から俺が出すのはザーメンではなく、通常の数十倍の濃度のエクスタシージェルの原液だ。まあ、一度膣内に出されてしまえば、重度の媚薬中毒になり、ジェルなしでは生きていけない状態になるだろうがなあ。

快樂のために仲間を裏切り、悪に墮ちるがいい、キュアリーパール！」

「媚薬中毒……っ!? そんな、出してはだめっつ！ そんなの、中に出されたら……んあ
あつっ!! オチンチンが、クルうううっ!!」

もだえる顔をイヤイヤと左右に振り、抵抗を見せる雪歩の声を無視して、アンリーマンは一度腰を大きく引くと、そこから全体重をのせて、思い切り膺奥を突き抜いてきた。

ガチュンツツ！ という淫靡な水音と衝撃音が響き、膨れ上がった牝の欲求が、臨界ギリギリの牝壺へと、禁断の熱い奔流となってぶちまけられる。

ドブウオオオツツツ！ ドチュツツ、ブチャアアアアツツ!!

何億もの子種の代わりに、真っ黒いドロついた洗脳粘液が、雪歩の震える膺へと放出され、子宮の中を牝の官能で満たしていく。

「んぎひいいいいんんっつ！ きた、きましたっつ！ おひいいいいんんっつ!!」

お淑やかな深窓の令嬢といった雰囲気雪歩の口から、まさに快樂に染まりきった牝の咆哮そのものの、淫らすぎる絶叫が発せられる。

背筋がギュンツツ！ と大きくしなり、美麗な尊顔までも、後ろへと仰け反らせる。その表情は生まれて初めての凄絶なアクメ快樂に完全に蕩けており、舌をだらしなく垂らし、目はぐるりと白目を剥いている。

敵に絡ませたムチムチの太腿はおろか、エクスタシードレスに覆われ、凹凸と媚肉のくつきりとした若々しいボディラインが、ピクンピクンツツ！ と雷に打たれた蛙のように無様に、そして淫らな絶頂痙攣を繰り返す。



胸の瓶と同じく、チューブに繋がれたそのマスクにも黒い液体、エクスタシージェルが送られてくる。頭部に張り付いたマスクの端から垂れたジェルが、亜里沙の耳の穴にたどり着き、そこからズルズルと頭の中へ侵入してくる。

（あ、頭に変なイメージが……っ。あ、ああっ、私は、キュアリーサファイアはエッチなことが大好きで、気持ちいいことのためならなんでも……んくっ、なにこれええっ!!）

マスクから脳内へドロついたジェルの侵入を許すと、胸のときは違う、それ以上に淫らかな感覚が敵と戦う心を押しのけて、頭の中を埋め尽くしていく。

淫らかな官能に犯されている心に呼応するように、身体中の性感帯がさらに過敏になっていく。黒く染まったドレスの胸部分を押し上げるように、亜里沙のかわいらしい乳首がムクムクと硬く、そして熱く鋭敏に勃起してくる。

「ま、まだ感度が上がっていきなんて……えっ!! はひっ、あふううっ!」

ビキッ! と強くしこつた乳首がエクスタシージェルに張り付かれると、まるで乳首を激烈に抓られ、延々とこねくりまわされたかのような痺れが弾け飛び、頭の中が一瞬真っ白に染まってしまふ。

「ち、ちが……私そんな淫らなこと考えてなんか……っ。くふうっ、心が犯されてるっ。感じ方がさつきまでとはぜんぜん違……あっっ、はああああっ!」

両目を覆われていても、視界自体は制限されていない。ラバー状のマスクを透き通らせて横を見る。

すると花凛もまた、ジェルが脳内に侵入していた。強制的に見せられている卑猥なイメ

ージによって、すでに発情している若い身体が、ブルブルとエロティックな痙攣を見せている。

鮮やかなドレススカートからのぞく太腿を、左右に開いたり閉じたりしながら、腰を前後にカクカクと振っている様子は、大切な親友として見るに堪えない卑猥さだ。

そして、花凛に対しても、自分がそんな姿を見せていると思うと、悔しくて恥ずかしくてたまらない。

「ジェルが直接脳内を侵食し、お前たちの常識を変態の牝豚に染め上げているのだ。お前たちの力の源、正義の心の枷を取り払い、牝の本能に従うことが最上の悦びだと植え付けてやる。さあ、ブラックパールよ。こいつらにもお前が味わった、とっておきの快楽を味わわせてやるがいいっ！」

「はいっ。アンリーマン様。ようやく二人を犯せるのですね。わたくし、どれだけこのときを待ち望んでいたことでしょうっ！」

自分を悪に堕とした男に命令を受けた雪歩は、興奮気味に語ると、二本の魔パイプを、いやらしくべろおっと一舐めする。

亜里沙たちの悩ましい腰のラインをびっちりトレースしている黒いスパッツの上に、ぷつくりと充血しきった女戦士のワレメの形が、はつきりと浮かんでいる。

まだ性を知らない乙女でありながら、厚みとポリウム感ある陰唇が、スパッツに押さえられて、まるで別の生き物のように、いやらしくヒクつく。

そんな二人の欲情牝穴を見つめた雪歩は、瞳にぼおっと情欲の炎を灯すと中腰になって、

涎がついた張形の先端を、二人の美戦士の初心で発情しきっている陰唇に、楽しそうにギチュウウツツ！ と押し当ててきた。

ヴィイイイイツツツツツ！ ヴウヴウヴウツツツツ！！

「な、なにこれっつ?! んっひいっつっんっつっ?!」

「あああつっつ！ す、すごつつ！ こんなのでええつっつ!!」

これまでなんとか快感への反応を最小限に抑えてきた亜里沙たち。

しかし、女のワレメにバイブの全振動が集約された瞬間、拘束された両腕をブルツと引きつらせながら、亜里沙は絶叫し、花凛は大きな胸をブルンブルンツと揺らすように身体を反らしながら悶絶する。

背筋を駆け抜ける圧倒的な快感の電撃に、正義の心が牝の悲鳴を上げる。

普段はおとなしい花凛の、喉奥から吐き出される艶めいた絶叫が耳に届き、つられるように亜里沙自身も、我慢の限界を超えた、甘い官能の色に染められた鳴き声を響かせる。

（あ、くふうああつ……つ。私これ、すごい……この感じ、すごすぎるううつっ!）

キュアリープリンセスに目覚めたばかりの雪歩を洗脳し、さらに彼女を使って、亜里沙たちを快樂洗脳する。

その卑劣さに、強い怒りを感じながらも、股間から発した信じられない官能の落雷に、亜里沙の理性が焼き切れそうになる。

どうにか気丈に踏ん張ってきた両脚がガクガクっ！ と激しく痙攣する。しかし雪歩が握るバイブは、亜里沙たちの見るもいやらしい激しい痙攣にも、ブラシを一ミリも離さず

に、しっかりとスパッツの下の女芯を追従し続ける。

「ああっ、ジェルが中にたっぷり詰まったエクスタシーバイブ、サファイアとアンバーのマンコを、スパッツの上からゴシゴシいっ♪ どうです？ オマンコ気持ちいい？ イに決まっていますよねえっ!? だって私たち本当は、淫乱な牝豚なんですものおっ！」

ヴヴィヴヴィイイイインンンッ!!

興奮気味にしゃべりながら、雪歩はバイブの振動モードを一気に最大にする。先ほどまでとは比べ物にならない勢いで、ブラシがスパッツの生地ごと、快樂神経剥き出しの女肉を擦り上げていく。

そこから発される破滅的な快感に、亜里沙たちキュアリープリンセスの女の部分が、正義の心を、屈辱と裏切りの悦楽一色に塗りつぶしていく。

「あひっ、くふうっ……はうううんっ！ はあ、ああ……声が、嫌なのに声出ちゃうっ！ くっはあああんっつ！」

「あ、ああっ！ アソコぐじゅぐじゅになっちゃうっつ！ サファイアっ、私、怖い……身体も頭も、どうにかなっちゃうよおっつ！」

花凜が不安がるのもよくわかる。

亜里沙も聞きかじった知識から、快樂が限界を迎えるとどうなるか……頭ではわかっている。

しかし普通の女性がセックスで感じる数百倍……。さらにはその快樂を乗ずる、正気を失いかねないほどの脳内洗脳快樂に、理性の対処がまるで追いついていない。そんな状態

で、女の快樂の頂点に突き上げられてしまったら……。

「あつはああんつつ！ はひつ、い、いいんんつつ！」

「いや、いやいやつつ！ んはあつ、あうつ、はううんんつつ！」

たとえ何時間、何日もの間、非道な拷問責めを受けようとも、友を救出し、悪を倒そうと誓っていた心が、全力振動のパイプを女の急所に当てられてから、わずか数分で快樂に蕩けかかっていることが、無念でたまらない。

雪歩と自分たちをこんな目に遭わせるアンリーマンに、強い怒りの感情は湧くのだが、それよりも膺内を灼熱の甘美感で沸騰させるパイプからの刺激が気持ちよすぎて、理性が本能に屈してしまう。

「あらあ、どうしましたかお二人ともお？ わたくしを取り戻すのではなかったのですかあ？ なのになんです、この淫らな恰好はあ？」

雪歩の指摘通り、亜里沙と花凜は、あまりの快感に、両脚がガニ股に広がり、無意識に腰を前後にクイクイと動かしてしまっていた。

粘つくジェルに張り付かれた胸の先端には、ぷつくりと膨れ上がった乳首が、物欲しそうにブルブルと震えている。

さらには、膺奥から際限なく溢れ出す本気汁が、ネットリと淫猥な糸を引きながら、足元に牝の汁溜まりを形成しているという、無様極まる有様だ。

「あつは……あつ。お、お願いだからそんなこと言わないでパールっ。ああつ、身体が勝手に……っ。んふ、あ……くひいんつつ！」

「もうゴシゴシするのをやめてえっ！ 私壊れちゃうっ……これ以上気持ちよくされたら、本当に死んじゃううううっ!!」

亜里沙の口から、凜々しく大人びた声とは違う、艶のかかった声が漏れる。

花凜は際限なく上がり続ける快感から、どうにか逃れようと、子どものように首を左右に振りたくっている。

（し、信じられないわっっ!! 全身が感じすぎる……っ。気持ちいいので頭がいつぱいで……っ。身体が抑えられないっ!）

ラバーマスクに覆われた顔を正面に向けると、アンリーマンが憎らしい余裕の笑みを浮かべている。

ブラックプリンスに堕ちた雪歩の表情は、喜悅とSっ気が混じり合っており、その妖しさは、見つめているだけで自分も悪の道に堕ちてしまいそうになってしまう。

「うふふう、お二人のマンコが、スパッツの上からでもわかるくらい震えてきましたよ？ もうすぐイっちゃうんじゃないですか？ そうですよねえ、サファイアにアンバー!!」

雪歩の興奮の度合いとともに、パイプでの責めが一段と激しさを増してくる。

スパッツにくつきり浮かび上がった発情陰唇の輪郭をなぞるようにパイプを動かし、パツクリと卑猥に開いた膣の入り口に、ゴリゴリとブラシの先端を押しつける。

「い、イク……ッ!! え、あぁっ……ね、ねえ？ イクっでどういことっ!! わ、私たち、どこへ行っちゃうのっ!!」

亜里沙以上に初心な花凜が、不安そうに尋ねてくる。亜里沙も意味だけは知っていたが、

経験したことはもちろんない。それに、そういうことゝは、愛し合う二人の関係で成し遂げられるのが普通であつて、こんな……敵に媚薬を盛られて、仲間に無理やり昇り詰めせられる結果など……想像できるわけがないし、したくもない。

「アンバー……っ。そ、それはっ。んんっつ、きゃふっ……んはあああっつ!!」

「それは今すぐに教えてあげますよ。わたくし、ブラックパールが牝の絶頂の素晴らしさをね! バイブレーション、最強モード♪」

ヴヴィヴィヴィツ!! ヴヴァアアツツ!!

亜里沙が恥ずかしさと気持ち良さから答えられずにいると、その瞳をサディステイックな感情に輝かせる雪歩が、バイブの振動を最大のさらに上……もはや相手を気持ちよくさせるというよりは、快楽で破壊させるほどの激烈振動モードに切り替える。

しかも成熟した極上牝アワビの中心部と、勃起したクリトリスを同時に押しつぶすような責め方だ。

完全にサドの快楽に目覚めた雪歩は、仲間であり、親友と慕った亜里沙たちに、めくるめく女の快楽を強制的に刷り込んでいく。

「おおっひいひいっつ! くるっつ! なんかくるっつ! こんなすごい我慢できないよおっ!」

「が、頑張つてアンバーっ! 絶対負けちゃダメっ、パールにこんなことさせちゃ……んほひいひいっつ!!」

亜里沙と花凜の声が、かわいらしい乙女のものから、性欲に飢えた牝のものへと、自分

たちでも驚くほどに変わっていく。

快感の上昇とともに、ドレスを覆うジュエルの蠢動が速まっていく。そしてそれは亜里沙たちの性感を加速度的に押し上げる。パイプがスパッツの上から、厚い扇状の花層を擦り上げるたびに、戦士としての気高いプライドが弾け飛びそうなほどの快感電流が、脳内全体でスパークする。

「あ、あひいっ……っ。負けない……私たちはあああっつ！ ほひっ、っ……あああっつ、ふひいっいんんっつ！」

亜里沙がいくら気力を振り絞っても、もう歯を食いしばることさえできなくなっていた。初めて経験する圧倒的な快感の大波に、セクシーな女体をビクンビクンッ！ と痙攣させる。

「気持ちイイっつ！ 気持ちよすぎるよ、溺れちゃダメだつて、わかってるけど……あ、あああん、ひゃあああんっつ！」

花凛はもう、本当に死んでしまうのではないかと思うくらい、身体をブルつかせ、パイプを押し当てられたスパッツから、温泉のように本気汁を噴出し続けている。しかもその姿は痛ましいというよりは、悩ましいほどにエロティックなもので、自分もそうなのかと思うと、さらに興奮が昂ってしまう。

「ほら、早くおイキなさい♪ 見ていてあげます、かつての仲間の初アクメの瞬間をつ！」
雪歩が壊れんばかりの高速振動を続けるパイプの頭を、スパッツの上にぶつくりと淫猥に浮かび上がった牝口の花層へ、グチイイッ！ と思い切り押しつけた。

ヴチユチユチウツツツ！ ジュバアアアアツツ！！

「あつっ、あああああつっつ！ い、いやいやいやつっ！ いひひひひつっ！！」

「ひひひひんつっつ！！ クルクルツツ！ きちや……つっ！！」

瞬間、世界が一瞬にして白く弾け飛び、情けないという感情も、悔しい感情もすべてが消失して、ただ爆発的な快樂の嵐に、理性を根こそぎ持っていられる。そして……。

「んはああああんつっ！ あふっ、ほっ、おとおおおつっつ！！」

「あひっつ、んおっ、おおほおつっ！ きやひひひんつっ！！」

紫とオレンジの優雅なドレスを身にまとった正義のヒロイン——亜里沙、そして花凜の背筋が二人同時にビツクンツツツ！ と盛大に仰け反り、ガニ股状の下半身がガクガクッ、ブルブルウウウッ！ と狂ったように痙攣する。

ビツチリと張り付いたラバーマスクの奥で、瞳がグルンツツ！ と裏返り、だらしなく舌を垂らしたアへ顔へと変わっていく。

「あつはつはあああつっ！ イキましたね!? とうとうイッちゃいましたねえ、お二人ともおつ！ 無様です、なんて淫らなアクメなんでしょうねえ!!」

可憐な伝説の戦士の屈辱的なまでにエロティックな初絶頂に、雪歩は高笑いを披露し、悦に入っている。

しかし今の亜里沙は、変わり果てた仲間の姿に感傷的にはなれなかった。そんな生易しい感情に浸る暇など一瞬たりとも隙も与えない快感に、昇り詰めっぱなしになっていた。

（な、なにこれええつっ!? これがイクツツてことおつっ!? すごい、すごすぎるわつっ！



気持ちイイツ、気持ちよすぎるううつつ!!)

純真無垢な少女の脳髓に、牝の絶頂……それも普通の何百倍以上もの快感が、永久的に刻まれる。これまでキュアリープリンセスとして体感してきた、ありとあらゆる幸福感、達成感をはるかに凌駕する快感という大波に、亜里沙の意識が吞まれていく。

「ひゃふううんつつ！ イ、イクツツ……これが、イククウウツツ!! ああつ、サファイア……止まらないつつ！ 私、イクの止まらない……んほおおおつつ!!」

「アンバー……つつ！ わ、私も止まらない……つつ！ イクツツ、イクツツ！ パールのブラシでイグウウウツツ!!」

（く、悔しいのに……止められないつつ！ 頭おかしくされちゃつて……つつ、こんなエッチな言葉……私、本当の変態に調教されてるううつつ!!）

ラバーマスクから注入されるジェルによって、脳内の思考や記憶が直接、牝本能に従うように洗脳調教されていく。

ついさつきまで口にしたくなかった絶頂を告げる言葉を叫ぶのに、もはやためらいは感じない。むしろ、イクと叫ぶこと、野太い獣のような声を発することで強制分泌される快感物質に、正義の理性が屈していく。

ブシャアアツツ！ ジョバアアアツツ!!

「おほおおおつつ！ な、なにいつ!! お、おし……じゃな……熱いのが、んひいいいつつ!!」

「気持ちイイツ、これブシブシ漏らすの、すごおおおつつ!! なにこれ!! 気持ちよ

すぎるよおおっつ!!」

スパッツをビショビショにしながら、股間から噴き出る熱湯に、さらなる羞恥の高みへと連れていかれる。

洗脳ジェルが教え込む、女の潮噴きという現象に、たまらない恥ずかしさを感じながらも、牝汁を噴き出し、雪歩やアンリーマンに見られることが、極上の快感に思えてくる。

「はあはあ……っ。あ、あひっ……っ。ほお、おおおんっ」

「う、ひ……ふへあぁ……っ。お、ひいっ」

まるで天国にでも飛ばされたかのような、壮絶な快感からの余韻に浸る、亜里沙たちの品のない声が部屋に響く。

「くくっ、まだ処女だというのに、まるで盛りきった牝のような声だな。脳内へのジェルの侵食は順調なようだ。よし、ブラックパールよ。そろそろとどめをくれてやれ」

「はい、わかっております、アンリーマン様♪」

雪歩は一度パイプを遠ざけると、マイナスエナジーを両手に集め、二人が穿いたスパッツの股間部分を、躊躇することなくピリリイッ! と破り取ってしまう。

隠すもののなくなつたキュアリープリンセスの女の秘園が、アンリーマンとブラックパールの眼前に晒される。

（はあ、あぁ……見られてるっ?! 私の大切な……イッたばかりのアソコが、パールたちに見られちゃってる……っ!）

ようやく余韻が終わりかけ、一息つけると思ったのに、まだ誰にも見せたことのない女

の秘部が露わにさせられてしまう。

しかも破れたスパッツからのぞく美麗な双華は、自分自身が見たことのない淫らな牝の妖花を満開に咲き誇らせていた。

スポーツ少女らしく、手入れの行き届いた短い陰毛を押し広げるように、陰唇がぷつぷつと赤く、ズキズキと痛いくらいに充血しきっている。

ぴつちりと閉じ合わさった状態しか知らなかった牝の二枚貝は、まるで雪歩たちに見てくれと言わんばかりに、左右にくばあつと開ききっている。

さらにスパッツをグチョグチョにした甘い愛液は、亜里沙が止めようと意識しても、まるで無視して、ドブドブと後から後から尽きることなく湧き出てくる。

「ああ、お……お願い見ないでパールつつ。サファイアも……見ないでええつつ！」

同じ淫らな境遇に置かれている花凛が、恥ずかしさのあまり、半分涙を浮かべながら、自分と雪歩に懇願する。

「アンバー……。くっ、こんな……あうっ！ んんつつ」

氣落ちする親友を勇気づけようと、両腕に思い切り力を込めて、アームを外そうとする。しかし無慈悲に両腕を拘束するアームは、亜里沙の羞恥心を煽るように、きつく拘束を強めてきて、紫の美少女戦士の気高い抵抗を、淫靡なあがきへと貶めてしまう。

「無駄ですよ。さあ、サファイアにアンバー。女に生まれた悦びは、まだまだこんなものではありません。アクオチーノに仕える幸せを、このデイルドーでじっくりと覚え込ませてあげましょう！」

すでに邪悪に堕ちた雪歩の手には、パイプからデイルドーへと変貌した魔性の淫具が握られている。

（あ、ああ……あれがデイ、デイルドー？ そ、それで私たちのア、アソコを……っ。そ、そんなっ。あ、くうっ、外せないっ！ くる、太いのきちゃう……っ！）

デイルドーは、太さが雪歩の握り拳ほどもあり、長さはゆうに二十センチ近くもある。

ラバーマスクから理性に向けて発せられる淫靡な波動は、それを素直に受け入れろと脅迫してくるが、まだ指を入れたことすらない亜里沙は、未知の経験に身体を強張らせる。

「怯えなくても大丈夫ですよ。これは先端からジェルをにじませて、処女膜を破らない特別製です。わたくしですら経験させてもらえなかった、ヴァージンのままイキ狂う快感、

ああ、羨ましますます♪」

ズブズブツツ、ヌプウウウツツ!!

「お願い、パールっ！ 正気に戻っ……くひいんんんっっっ！」

「やめ……やめてっ！ そんなの入らな……あつふああああんんっっ!!」

キュアリープリンセスとして、戦い抜くことを誓い合った大切な仲間……。その少女から受けた初めての膣内への異物挿入に、我慢のできない牝の声が腹の奥から響き出る。

瞬間、頭がまばゆい光で染まり、拘束された身体全部が、ふわりと宙に浮いたような感覚に支配される。

雪歩に処女穴を貫かれた悲しさや、アンリーマンに対する怒りが閃光の中に掻き消え、ただただ鮮烈な牝の快楽に溺れてしまう。

「チ、チンポ……入れられたただけであんな……っ。アンバーつつっ!!」

笑顔が最高に似合っていた少女の顔は、今や悦楽の官能に蕩けきつており、狂気の快楽に見開かれた瞳は、グルンツと淫靡な半開きになっている。

構わず男子たちは、若い牡欲が爆発する膣と尻穴への二本差しを敢行し、さらには大きな二つの胸や露わになった柔肌、加えて花凛の牝の臭いと汗が染みついたスーツにいたるまで、無数の肉棒を擦りつける。

「ひいああんつつっ! んおおっ! ぎもぢいいっ! ずっとイクツ、もつとイクツ! イクイクイクウツ! もうなにも考えたくないのっ、気持ちイイのがいいよおっ!! おっほおおつつっ!!」

黒いラバースーツの花凛が、ドロリとしたエクスタシージェルが混じった本気汁をブシユブシユツツ! と肉唇から噴出していく。

そして聞くのもおぞましい牝絶叫とともに、子宮を支点として、ガクンガクンツツ! と背筋が折れんばかりの連続絶頂痙攣を繰り返しながら、途切れることのない快楽の頂で悶え続ける。

「くく、これがエクスタシースーツがもたらす圧倒的な快楽だ。今のキュアリーアンバーは、これまでとは比較にならない牝の天国へ盛大にトリップしていることだろうよ。もちろん片道のなあ、くくく」

「アンバー、どうして……っ。ひどい、ひどすぎる……っ!」

すでに花凛には伝説の戦士・キュアリーアンバーとしての面影は一切見られない。ドロ

ドロと身体を流れるエクスタシージェルが、花凜の心までも快樂でコーティングしていき、淫らにてかついた黒い女戦士へと作り替えてしまったのだろう。

花凜のことだ。間違ひなく最後までみんなを信じ、自分たちの使命を貫き通そうとしていたに違ひない。

けれど、アンリーマンが開発した、非道の洗脳ジェルの恐ろしさを、今はっきりと見せつけられてしまった。

伝説の戦士といつても、結局は初心な少女であること。仲間を想うことで補ってきた、小さな心の弱さ。亜里沙たちが持つ、それらほんのわずかな弱みを、快樂という抗いきれない本能で、悪に跪く最凶のプリンセスへと変えてしまう。

高潔なヒロインであるがゆえの後悔の念が利用され、破壊的な快樂への依存を促されると、それを与えてくれるアクオチーノの言いなりになる牝奴隷戦士に墮とされていく。

「イ、イヒイイツ！ もつとおつ、もつとチンポちようだいっ！ マンコ、ケツウウツ！ 気持ちいいことちようだいっ。最低な牝豚ビッチのキュアリーアンバーをむちやくちやにしてよおおつっ!!」

全身真っ黒に染まった花凜が、見たこともない淫らな動きで、ガクガクと自ら腰を振り、指でくばあつっ！ と女のワレメを押し開く。

露わになった肉壁は、まるで別の生き物であるかのように、グネグネとヒダを蠢かせている。そして浅ましく牡棒を求める花凜の表情は、目が血走り、もう気持ちいいことしか考えられない、鬼気迫る快感ジャンキーのものだった。

「そうですね、アンバー。チンポはいいでしょう？ みなさんだって、あなたのマンコが、ケツが、おっぱいが、エッチなあなたがいいんです」

「ブラックパールの言う通りだ。キュアリーアンバーよ。本当は戦うよりも、気持ちいいほうがいいだろう？ みんなもそうだ。エクスタシースーツに染まり、快楽を貪る様。それが平和を守る伝説の戦士の真の姿なのだ！ そうすれば、みんなが幸せになれる、くく」

「パ、パール……。アンリーマン……。ツッ！」

生徒たちの輪姦劇を見つめるだけだった雪歩とアンリーマンが、快楽の虜に堕ちかけている花凛に、妖しくささやく。

しかしそれは違う。快楽に堕ちるということは、アクオチーノの手先になるということ。みんなの顔から笑顔が消え、すべてが絶望と憎しみ、そして快感に書き換えられてしまう。

それを阻止し、快楽とは違う、他人を思いやり、明日への希望を紡ぐことこそが、キュアリープリンセス、伝説の戦士の使命のはずだ。

しかし、そんなピュアな心も、すでに身体を調教、そして理性の大半を洗脳された花凛にはもう……。

「あ、あひい……っ。これがみんなの幸せ？ みんなの気持ちいいこと、なの？ 私の使命……私とみんなが気持ちいいコトって……んほあああああっ!!」

花凛の心の光が弱まっていく瞬間を見逃さない官能ジェルが、明るいオレンジを漆黒に塗りつぶされた戦姫に、身を焦がさんばかりの悦楽衝動を植え付ける。

ブシユオオツツ！ ドブウウウツツ！

ぴっちり張り付いていたエクスタシースーツの表面が波打ち、ジェルが耳から寄生虫のように花凜の脳内に潜り込む。

衰弱した頭の中を弄り回され、快感フェロモンを過剰分泌されていく。花凜が、限界を迎えたかのように、両手で全身を掻きむしり、破壊的な快楽に、大量の牝汁を噴き上げて悶絶する。

「おおつつ、これえつ……。みんなこの気持ちイイのでいっぱいになれば……。つ。イクツ、ああつ、一緒にイケば幸せええつ……。つ！」

「そうだぜ、宮瀬っ。俺たちはお前のマンコが大好きなんだっ！」

「もつとシコらせてくれよっ。ずっと俺たちの牝奴隷でいてくれっつ！」

マイナスエナジーによって操られる、守りたいと信じた生徒たちの肉欲に溺れた幸せそうな……。どう見ても正気を失っている顔が、全身を走る快楽の奔流とともに、花凜がこれまで築いてきた正義の心の砦を崩していく。

「くく、生徒たちもそう言っている。それに、お前の大事な親友もなあ？」

アンリーマンの言葉に、ハツとさせられる。自分が堕ちるのを堪えてこられたのは、生徒たちもそうだが、なにより花凜や雪歩という大切な仲間たちのことを想ってこられたからだ。

雪歩も、自分たちキュアリープリンセスを責めることで、その洗脳を強固なものとしてきた。守るべき人たちに見限られ、もう陥落寸前の花凜の心に、決定的なとどめを刺す方

法があるとすれば……。

ドブチユウウツツ！ ドズンドズンツツ！ シコシコオオオツツ！！

「あつはあつつ！ いやつつ……やめ……つつつ！ んほおつ、やめてええええつつ！！」

亜里沙を犯していた男子たちの突き込みが、一気に激しさを増す。まだ陰部はジェルに侵されていないとはいえ、通常をはるかに超える快感を叩き込まれていることに変わりはない。

そんな感じざるを得ない自分を、花凛の蕩けた瞳が見つめてくる。

「サファイアも気持ちいいことしたいんですつて。アンバー、あなたはもう頑張らなくていいんですよ。わたくしと、サファイアと一緒に、アンリーマン様の牝奴隷へと堕ちましょう」

亜里沙と花凛を、恍惚の瞳で見下ろす雪歩がささやく。

黒いスーツ姿の花凛を犯す男子たちの腰つきもまた、一気にフィニッシュへ達するべく、肉棒の動きを速めていく。

「んおつつ、おつおおおつ！ あはつ、あん、アンバーつつ！」

「いいいつ、ぎもぢいいいつつつ！！ おおつ、サファイアも悦んでるうつ。みんなと一緒に。これがキュアリープリンセスの、本当のすが、おほつ、ひぎゃひいいいつつ！！」

亜里沙が感じる姿を見せれば見せるほど、花凛の精神侵食が完了していく。

「ダメよ、アンバーツツ！ 彼らの言うことを聞いちゃダメつつ！ ほひいつ、私も我慢

するから……ほおっつ！　そこダメっ、くうっ……おおんっつ！」

生徒たちに犯されながら、それでも必死に親友の名を呼び続けたいとは思う。けれど男子たちの肉棒は若さに溢れ力強く、肉体改造を施された亜里沙の女体を一気呵成に追い詰めていく。

「ひぎいうううっつ！　ダメエっつ、今突かないでっつ！　アンバーの前で、おほおおっつ！　イキたくな……ひいひいっ!!」

膣口の入り口ギリギリまで引かれた男根が、一気に子宮の入り口をズドンッ！　と叩く。それだけでも、意識が桃色に染まりそうな快感なのに、腸道に突き込まれた別の肉棒が、前とは交互のタイミングで尻壁を擦り上げると、すぐにも絶頂に達してしまいそうになる。

エクスタシージェルに覆われた豊かな巨乳が、ビクンビクンッと扇情的に震えあがる。大きな谷間にズニユツツと二本も男根が挿入され、ジュコジュコと激しくまさぐつてくるのが、たまらない愉悅を巻き起こす。

黒い粘液にまみれ、きつく勃起した乳首を、男子たちが舌で舐めまわし、あげくギリりと歯を立てて、ラバーニップルを抜き抜いてくる。

「うふふ。さあ、アンバー。あなたの名前は、なんですか？」

「わた、ワタシノ名前ええっつっ！」

「パール……っ。待って、二人とも私が絶対に助け……っ」

雪歩に問われた花凜の顔が、怖いくらいに幸せそうで、妖艶なアクメの表情で固まって

いく。そんな淫らな顔を、もう一度笑顔にしたいと思う。

「出すぜっつ、サファイアっつ！ おおおおっつ！ くらえええっつっ!!」

「イケよ、向坂ああっつっ！ 俺たちのザーメンを、お前の子宮で受け止めるおおおっつ!!」

ドビュオオオオオツツツ！ ビュビュ、ドボオオオオツツツ!!

瞬間、子宮を前と後ろから同時に突いた肉棒が、亜里沙の女体の中心で爆ぜる。握らされていたものも、胸や腋、髪の毛を扱っていたものも、男根のすべてが、亜里沙を絶望の快楽へと飛翔させる。

「おおおおっつ……そんな、そんな、なああああっつっ!!」

大切な親友が、仲間が、また一人悪の手に堕ちていこうとしている。それなのに、どうすることもできないまま……守ろうとした生徒たちのザーメンで……。

「イイイッグウウウツツツ!! あひいいつつ！ んほおおおおおおっつ!!」

子宮と腸内を焦がす灼熱のザーメン流がもたらす快感に、正義のヒロインの牝の部分陥落する。

全身にぶちまけられるドロリとした牡汁の熱さが、たまらなく気持ちいい。

紫から黒のドレスへと変わっていく腰を、はね上げんばかりに狂おしく痙攣させる。艶っぽい喉を大きく反らし、さつきまで親友を想っていた唇から、花凛に負けず劣らずの獣声を響かせる。

目は完全に裏返り、垂れた眉と出しっぱなしで戻らない舌を晒す姿からは、正義のヒロ

インの説得力がまるで感じられないアクメっぷりだ。

（おお、おおっ……。イ、イっちゃ……。ああつ。お腹の中あ。胸も髪もお尻も、みんなのザーメンが熱くて、気持ちよくて……。あへええ……。つつ）

わずかばかり残る理性の灯火が、大切な仲間のために、もう一度立ち上がるよう、かすかな声を吐き出す。しかし男子たちの若い猛りの白濁を一身に浴び、ビクンビクンっつ！と激しい絶頂痙攣に打ち震える女体は、すでに完全な淫欲のオブジェと化してしまっている。

「サ、サファイアもイっちゃたあつ……。私もイクよつ……。いつてもいいんだ。私は、私は……。アアツッ！」

「くひつ、アンバーだめつ……。ひぐうつ！ それだけは、あなたは正義を守るキュアリアン……」

快感で頭が真っ白になりそうな中、どうか花凛の意志を繋ぎ止めようと声をかける。絶頂の余韻から早く抜け出そうと、甘く痺れた全身に無理やり力を込める。しかし、もうなにもかも遅かった。

花凛が、なにもかも捨て去ったかのようにニタァと不気味に微笑む。その大きな瞳が快楽の色に染まっていき、グルンツと淫らかな半開きになる。

「——ワタシは、ブラックアンバー……。つ。アクオチーノに絶対の忠誠を誓う、淫らでド変態の最凶戦士……。いひいひいっつ!!」

花凛が絶頂にも似た奇声を張り上げると、ぴっちりとした全身を覆うだけだったエクスタシ

ースーツに、雪歩と……ブラックパールと色違いのオレンジのマイクロスカートと、胸元を飾るフリルが装着される。

「ああ、嘘……アンバーが、ブラックプリンセスに……っ」

雪歩に続いて、花凛まで……。新たな悪堕ち女戦士の誕生に、亜里沙の心が強く締め付けられる。視界の隅では雪歩が妖しく微笑み、そしてアンリーマンが口を大きく開けて、高笑いしている。

「くくく、はっはっはっはっはっ！ いいぞ、これで二人目だ。さあ、ブラックアンバー、悪に下ったお前の姿を見せつけてやるがいい。守りたかった人間たちに、仲間と慕ったキュアリーサファイアになあつ！」

「は、はいい……っ！ アンリーマン様あつ。ブラックアンバーは……見せますっ！ みんな見てええっ！ 悪の牝豚戦士がイクところ、おほおおおっ！ イグイグッ……」

新たなブラックプリンセスの誕生を祝うかのように激しさを増す、男子生徒たちのピストンによって、花凛が瞬く間に絶頂へと駆け昇っていく。

「アンバー……、ああっ」

そんな姿を、愕然とした表情を晒しながら見つめている亜里沙に、花凛の大きな瞳が向けられる。その表情は、花凛がいつも見せてくれていた他人を想う笑顔ではなく、正義の心を捨て去ってまで手にした、牝の達成感で生まれた、妖艶すぎる微笑だった。

そして限界を迎えた男子生徒たちが、猛りきった牡獣のマグマを爆発させ、黒に染まったプリンセスに、墮落の烙印絶頂を刻み込む。

ドババアアアアツツ！ ドビュビチュツツ！

「のほおおおうつつ！！ イツグツツ、イクイクツツ！ みんなの精液が、死ぬほどギモヂイイイよおおおつつ！！」

学園の生徒たち全員の視線が集中する中で、花凛は過去最大のエクスタシーに昇り詰めていった。

背筋が折れんばかりにはね上がり、恥知らずに開け広げられた両脚がビクビクウウツツ！と大きく震える。

舌が垂れた唇からは、だらしなく涎が飛び散り、白目を剥いた瞳は、完全に快楽に溺れてしまい、正義の心をなくしてしまっている。

「んおおおおつつ！ ほつごおおつつ！！ イグイグツツ！ あへへええつつつ！ ブラックプリンセス素敵だよおつ。変態スーツしゃいこうつ！ あんつ、イイヒイイイイイツツ！！」

エクスタシースーツがもたらす、あまりの激悦に花凛が狂ったような嬌声を叫びたてる。股間からプシアアツツ！ と大量のマン汁を迸らせ、ラバースーツに包まれたムチムチの太腿が快感に痙攣する花凛は、正義が官能に敗北していく絶望的な色気を放っている。

「いや、アンバー……つつ。どうして……つつ」

背筋が凍るほどに淫らな親友の悪堕ち絶頂ぶりに、亜里沙の心が悲しみと悔しさに打ちひしがる。

「おほ……おおつ、ほひいつ……あらまほげるうつつ。わらひ、ブラック……アクオチー

ノに、じえつらいの……ちゅうへいを、おとおつ」

黒いラバースーツが、一度に何人もの大量白濁液によつてベトベトに汚れていく。

花凛は、スーツにくつきりと浮かぶ艶めかしいボディラインをビクビクと下品に震わせ、唇をだらしなく半開きにしている。

つい数日前まで、穢れない処女だった女芯には、ポツカリと淫靡な肉穴が開いており、奥からゴブゴブと、溢れかえる中出し精液を噴き出している。

しかも一回程度ではまだ物足りないばかりに、充血し何倍にも膨れ上がった牝アワビの腔壁は、亜里沙や生徒たちに物乞いするように、いまだにウネウネといやらしい蠢動を続けている。

「ふふ、あのアンバーがこうまで淫らに。素敵です、アンリーマン様」

「仲間が増えてよかつたな、ブラックパール。さて、これから二人でアンバーの洗脳の仕上げに入るとするか」

アンリーマンと雪歩が、股を開いたままビクビクと震える花凛を連れ去ろうとする。

「ま、待ちなさい……っつ。く、ああ……アンバーを返し、なさいよっ！」

亜里沙自身、絶頂の余韻からまるで力が入らない身体を、気力だけで奮い立たせる。もうこれ以上、仲間を悪に墮とすわけにはいかない。

キュアリープリンセスの力を、人々を支配するために使わせるわけには……っ！

「ふふ、安心しろ、キュアリーサファイア。お前の相手はまだたくさん残っているぞ？ お前の改造されきつたそのエロい身体で、せいぜい悦ばせてやるといい。くはははっ！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!



電子書籍も配信中!

二次元 DREAM MAGAZINE DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



隔月
発売

隔月
発売

大人気PCゲームのコミック多数連載!



電子版は毎月配信!
書籍版は偶数月発売!

コミック UNREAL

ヒロインピンチDX

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、ダウンロードサイトなどで好評発売中!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。